

日独文学の〈対話〉
～ギュンター・グラスと小田実との関係を中心に～

依 岡 隆 児

Der literarische Dialog zwischen Japan und Deutschland
– die Beziehung zwischen Günter Grass und Makoto Oda –

YORIOKA Ryuji

言語文化研究 徳島大学総合科学部

ISSN 1340-5632

第23巻 別刷 2015年12月

Offprinted from *Journal of Language and Literature*

The Faculty of Integrated Arts and Sciences

Tokushima University

Volume XXXIII, December 2015

日独文学の〈対話〉

～ギュンター・グラスと小田実との関係を中心に～

依岡隆児

Der literarische Dialog zwischen Japan und Deutschland

— die Beziehung zwischen Günter Grass und Makoto Oda —

Ryuji YORIOKA

Abstract

In diesem Aufsatz möchte ich darüber nachdenken, was der Dialog in der Literatur zwischen Japan und Deutschland, den zwei Ländern, die im Zweiten Weltkrieg verloren, bedeutet, indem ich hier die Beziehung zwischen Günter Grass und Makoto Oda in Betracht bringe.

Beide Schriftsteller trafen sich einmal in Berlin und redeten über den Krieg und die Aufgabe der Literatur. Oda wohnte in West-Berlin von 1985 bis 1987 und war von dem Bürgertum dort stark beeinflusst. Grass hatte seit langem nach dem Treffen zwischen den Schriftstellern von den beiden Ländern verlangt.

Dort gab es natürlich den Unterschied zwischen den Beiden. Aber sie glaubten, die beiden Länder sollten der Kriegsschuld bewußt eine neue Rolle in der globalisierten Zeit spielen. Hier versuche ich nachzudenken, wie Japan und Deutschland in der Zukunft den bedeutenden literarischen

Dialog aufbauen sollen.

はじめに

ギュンター・グラスと小田実というドイツと日本の作家の関係は、従来ほとんど取り上げることがなかった。¹ しかしふたりは、戦後日独の戦争責任を問い、市民運動をリードしてきた作家として知られ、小田が1986年に西ベルリンに滞在しているときに日独作家シンポジウムで顔を合わせている。彼らが戦後、日独の市民の立場を代表していた作家だったとすれば、両者の比較からは戦後文学の社会的役割について貴重な示唆が得られるのではないか。考え方や行動の仕方には多くの共通点がある一方で、微妙な違いもあったようである。そこで本論は、ふたりの出会いから共通点と相違点のありかを探りながら、戦後の日本とドイツにおける戦争責任問題に対する姿勢や市民運動と文学の役割について比較考察することを、目的とする。

1 ドイツにおける小田実

小田実は、西ベルリンに滞在した経験がある。その間、在日朝鮮人の「人生の同行者」とともに生活し、西ベルリンで出産・子育てを体験するかたわら、日独作家の集いや日独の市民交流をコーディネートしている。またその過程で、日独における市民社会の違いを痛感することにもなった。

小田は、1985年6月から87年1月まで1年7カ月、西ベルリンに滞在した。DAAD（ドイツ学術交流会）の「アーティスト・イン・レジデンス」という外国の芸術家を招き一定期間の生活を保障し自由に創作をさせるという制度によるものだ。その間、ベルリン自由大学で講義もしている。

「アーティスト・イン・レジデンス」というのは、「居住中の芸術家たち」という意味で、小田によると、「その仕事を彼らは名声にも金にもまったく関係しないかたちでやっていた。つまり、好きだから、したいから、していたのだ。これは芸術における自由の、また芸術至上主義

¹ 参考、拙論「核の時代のギュンター・グラス～日独文学の〈対話〉研究」、『言語文化研究』第20巻、徳島大学総合科学部、107-116頁、2012年。

の究極のひとつの型であるにちがいない」²とする。一方、日本の芸術傾向については、「そこへ行くと、日本の芸術至上主義者たちは、あれはただ政治ぎらいを標榜するだけの、そうした世の中の風潮に身を寄せるためだけの身すぎ、世すぎの手段ではないのか、という気がしてならない」³とする。このように彼は、こうした制度の意義を認める反面、日本の芸術のあり方には批判的だった。

その間、娘が誕生し、「子供のお金（キンダーゲルト）」ももらう。この点については、「『子供代々』の国での歴史と政治の『体现』の誕生」⁴で、小田はこう記述している。西ベルリンで「人生の同行者」（「在日朝鮮人」）が85年10月に女の子を出産。帰国後自分の「戸籍」に入れてやっと「日本国旅券」を手に入れた。母親はそれを見て悲しむ、「この子、わたしの国に行けない」と。女の子の名前は「なら」、「奈良」でもあれば朝鮮語で「くに」のことでもある。「キンダーゲルト」の制度は、国籍にかかわらずなく西ドイツで生まれた子どもに支給される補助金である。このおかげで娘はミルク代を稼いでくれた—そう、小田は西ベルリンでの娘の誕生について述べている。こうした国籍に関わりがない、「市民」に対する手厚い社会保障に、小田は西ドイツの先進性を感じていた。⁵ なお、このころ、日本では西ドイツを成熟社会の一種のお手本とする傾向があった。たとえば、『豊かさとは何か』⁶はそうした社会福祉国家西ドイツを、バブル期まっただなかの日本社会の手本として紹介していたのである。

小田は当時の西ベルリンをどのように見ていたのだろうか。彼はこの東西冷戦に分断された都市に、自由な「空気」、開かれた「市民社会」の姿をみてとっていたようである。西ベルリン滞在記ともいえる『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』で、こう述べている。

「これは、ひと口で言えば、民族、国民を基本とした『民族国家』、

² 小田実『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』（『小田実全集』評論17）講談社、2012年、125頁。

³ 同書、125頁。

⁴ 『函書』1986年3月号。

⁵ ただし、こうした国籍のない住民にも認められる「シチズンシップ」に関しては、ドイツにおいては地域差が大きいとされる（参考、宮島喬『ヨーロッパ市民の誕生—開かれたシチズンシップへ—』岩波書店、2004年）。

⁶ 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波書店、1989年。

『国民国家』から、『市民』によりどころをおいた『市民国家』、さらに『国家』のワク組みをも越えた『市民社会』への移行がそこに見られるということだろう。(中略)『市民』は異質のものの存在を前提としている。そして、それはその基本にある開放性によって『国家』のワク組みを超えている」⁷。

ここからは、小田が西ベルリンにおいて、国家を超えた結びつきを可能にするものとして、「市民社会」があることを実感するようになったことがみてとれる。その西ベルリンという都市に「市民」という存在が居場所を得ているという理由としては、「まず、もともと大都市というものは、世界のどこでも異質のものがまざりあって『国民』的であるよりも『市民』的であることだ」⁸ としている。しかしそればかりでなく、ベルリンの場合にはさらに、戦争が大きく関わっていたことが推測される。戦後の冷戦の中で東西の境界地域として、西ベルリンは危機にさらされていた。

「『学生の反乱』のあと、ある意味ではさらに大きく深く西ドイツの過去の継続としての『戦後』に切れ目を入れたのは、八〇年代に入って始まったアメリカ合衆国による西ドイツへのパーシングⅡ、巡航ミサイルの配備だった。いや、これももとをもう少し正確にとらえて言うなら、配備計画があきらかになるとともに西ドイツ全体にまき起こった『反核のうねり』だったと言うべきことだろう」⁹。

このように、戦争に起因する危機的状況が市民性を成熟させ、社会にコミットしようとする意識をもたらしたと、小田は考えていたと推量される。

またこのような市民意識が「市民運動」となったひとつの例として、彼は「緑の党」（「ミドリ」党）の存在に注目している。

「『ミドリ』党は、大きく言えば、『学生の反乱』に端を発してこの『政治化』した市民の動きのなかで生まれても来れば、彼らによって強力に支えられて来ている。そして、現実政治の場で『弱者の政治』の実現を求める政治集団であることは言うまでもないだろうが、事態は逆にも言えて、たしかに政治の主張はいぜんとしてコール政権でもあればそ

⁷ 小田、『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』前掲書、23頁。

⁸ 同書、25頁。

⁹ 同書、51頁。

れとくみあわさったかたちで存在する社会民主党ではあっても、『ミドリ』党も今や決して無視できない政治集団として現実の場に存在している—そう逆に言うこともできる¹⁰。

このように、小田は緑の党に注目していた。しかし、ベ平連を組織化し、市民運動を日本で展開してきた小田は、この「緑の党」を同種の運動ととらえていたのだろうか。「緑の党」は政党として成立したのではなく、市民運動（市民イニシアティブ）の連合体である。Die Grünen（緑の人びと）という名称自体にもそうした経緯がうかがえる。あるイデオロギーのもとに結成された組織ではなく、環境問題や平和運動など身近な問題から行動を起こす集団の連合である。こうした組織を、小田が評価したことはごく自然な成り行きといえよう。

ところが、小田は、緑の党はそれ自体が「政治」であるとも述べている。

「じゃあ、『ミドリ+赤』で行こうと考えるのはあまりにも安易な結論の出し方だということだろう。『ミドリ』の動きは、それ自体がそれ自体として『政治』なのだ。それもきわめて『左』の『政治』である」¹¹。

ここで「赤」というのは、社会民主党のことである。赤緑連合という構想は、当初小田が見たように、緑の党が他の既成政党とは性格を異にする政党であるという理由で、難しいとされていた。ただし、小田は緑の党を「左」と呼んでいるが、必ずしもそうではなかった。ここで小田が緑の党をかなり左の政党だという理由で、中道左派の社会民主党とは組みしえなかったと考えていたとすれば、誤りである。もとは左翼だけでなく右翼に位置していた人々も入っていたのだ。むしろ、緑の党がそのような既成政党とは異なる構成原理で登場してきたがゆえに、この時点では連邦レベルでの連立は難しかったとみるべきだろう。実際、後にシュレーダー政権では「赤緑連合」は成立している。

とはいえ、小田はこうした「緑の党」のあり方をある程度、正確に理解してはいた。

「『ミドリ』党を、『市民運動』としてとらえてしまっただけではならぬことである」として、環境問題に関わる政党、アカとの結合が必要であ

¹⁰ 同書、55頁。

¹¹ 同書、233頁。

るとする人が多いし、西ドイツ自体にもこう考える人がいるがそれは誤解だ¹²として、こう述べている。

「『ミドリ』的動きとは何か。それは大きくまとめあげて骨太に言えば、現代世界、そのなかでの人間のあり方の根本的考えなおしを基本としながら政治の変革を考え、自分の住む社会の変革を求めて行くこうとする態度であり、それが集まってかたちづくる動きだろう」¹³。

緑の党の本質は、政治的市民運動にとどまらず、むしろライフスタイルの変革を進める点にあるとし、こうした広い視野のもと運動を展開することが「政治」であると、小田は見えていたのである。この点については、小田はそれと日本の狭義の市民運動が限られた範囲の問題に異議申し立てをするだけの集団であることとの差を感じていたのではないだろうか。おりしも小田が西ベルリンに滞在していた1986年には、チェルノブイリ原発事故が起こり、西ドイツにおいてもその影響は無視できない深刻な事態を招いていた。こうしたグローバル化する危機の先鋭化のなか、市民たちが緑の党のようなより大きな視野を持ってラジカルに生活や生き方を見直そうとする市民運動に共感していくのを、小田は目撃していたといえよう。

さらに、西ベルリンにおける生活を通して、ここの市民たちの間には自らの言葉で語り、議論し考えていくという「空気」があったと、小田は見ている。

「それぞれに自分のことばで語り、考えていた。すくなくとも、そう私に感じさせる空気がそこにはあった。

私の西ベルリン、西ドイツにかかわって『イメージ』のひとつは、どこか草ぶかい所にひっそりとかくれてものを考えている人がいるというものだ。そういう人の家の窓から灯火が洩れて来て、ふとのぞいてみると、彼、彼女が机のまえで何かしら読んでいる、考えている。西ベルリン、西ドイツと言うと、私の眼に浮かんで来るのはそうした姿なのだ」¹⁴。

こうした自由な「空気」のある市民社会は当然、外の世界や異質な存在に対しても開かれている。小田は西ベルリンに、一種の「多文化共生社会」を見ていたのではないか。

¹² 同書、147-148頁。

¹³ 同書、148頁。

¹⁴ 同書、131頁。

「そして、『国際化』は？—たとえば、それは街のなかに住むみんなのなかにあまた異質の存在が『共生』していることだろう」¹⁵として、続けてこう述べている。

「私がこの章（；『みんなが街なかで住んでいること』）で書きたかったことをあらためてまとめて言うと、みんなが街なかに住んで、しかも、思い思いにちがったことを考え、ちがったことをしている。そして、ときには、みんなの共通の利害にかかわることになると、みんながいっしょにことの解決をはかる—これが自由の空気をかたちづくる都市というものであり、『市民社会』というものだということであり、そのひとつの例として西ベルリンがあるということだが、日本の場合、みんながかけ離れたところに住みながら、いっしょのことを考え、いっしょのことをしている。しかも、かんじんのみんなでことの解決をはからなければならないときが来ると、バラバラになって、あげくのはてに誰か力のある人にまとめてもらう—そうになっているのではないか」¹⁶。

ドイツの市民社会では個が尊重され、違いを前提に対話・共働しながら、結果的に運動になっていくのに対して、日本ではみんな同じようなことを考えながら、集まってみるとバラバラになって、結局一部の指導者に主導してもらい、という違いを指摘する。おそらく日本に欠けているのは、そうした異なる者同士の共存を可能にする「空気」、もしくはその「空気」を醸成する「市民社会」なのだろう。

小田の思考は西ベルリンに軸足を置きながらも、そこからドイツのこと、ヨーロッパのこと、そして日本のこと、地球のことと同心円を描きながら、広がっていく。

「特徴は、地域に根差しながら、同時に全体を見ようとしていることだろう。全体のなかには、自分の住む小さな町のことだけでなく県全体、日本全体、あるいは、世界全体のことがある。それは自分のむきあう問題が保育所設置の問題であるとともに、国家機密法の問題でも核の問題でもあるフィリピンの問題でもあるということだ」¹⁷。

そして、こうした自分の住む所から同心円状に広がる意識の持ち方は、自由に主体的に行動する「市民」があってはじめて可能になると続ける。

「これは問題を自分の地域だけのものとしないうで、社会全体にあい

¹⁵ 同書、132頁。

¹⁶ 同書、133-134頁。

¹⁷ 同書、226頁。

たる問題としてとらえて、それが社会全体にあいわたる問題であるゆえに自分たちの手で解決して行こうとする市民の動きがあちこちに出て来ているということだろう。そういう動きを示すとき、人びとはただのチマタの人から『市民』になるのだが、同時にそのとき社会はただのチマタの人が住む世の中から『市民』が政治の基本に自らの『自治』をおく『市民社会』となるにちがいない¹⁸。

このように、意識が自分のことだけではなく、社会全体にわたる問題へと自然と広がっていくとき初めて、ひとは「市民」になるという。それゆえローカルからグローバルへと広がっていく彼の市民のとらえ方には、浮足だったところはない。つまり、人々が「市民」というあり方でつながり、大きな政治に対して弱い存在でしかないがゆえに連帯し、国境を超えて協働しうる可能性を開いていくのだ。「それは根本的には『強者の政治』に対する『弱者の政治』の形成においてほかにないだろう。その基本の原理として、日本国憲法がある」¹⁹とも述べている。

こうした視点からすれば、西ベルリンにしながら、日本のことを考えるというのは、ごく自然なことである。彼は「私が西ベルリンに一年半余いて考えたことは、結局、日本自体のことだった」²⁰と述べている。

こうして、小田は作家としてこの西ベルリン（ドイツ）と日本との間につながりを作り出そうと考えるようになる。彼は日本とこの福祉社会であり、市民が日常において活発に対話しながら、共通の課題の解決を図ろうとする市民社会を実現したように見える西ベルリン（西ドイツ）との間に「対話」を切り開くようになるのである。小田は両国の間でまず文学者同士の、そして次に市民同士の、対話・交流を実践していく。

2 日独文学者の出会い

小田実は自らが中心になって、DAAD「芸術家プログラム」主催で「日独文学者の出会い」というシンポジウムを開催した。日本から小田本人のほか、野間宏、李恢成、伊藤成彦、石田雄、ドイツからはギュンター・グラス、F.C. デリウス、インゲボルク・ドレービッツ、ヴァルター・ヘレラー（グラスを誘って参加）、ジークフリート・シャルシュミットが参加している。会合は二回で、1986年5月8日に西ベルリン芸術ア

¹⁸ 同書、226-227頁。

¹⁹ 同書、258頁。

²⁰ 同書、257頁。

カデミーで、5月10日にはカッセル市で、行われた。²¹

以下は、小田が1986年5月8日の西ベルリンでの「日独文学者の出会い」の基調報告として準備した原稿の概略である。

大阪では多くの建築物が1920～30年代のベルリンに範をとっていた。空襲で跡かたもなくなったが、「私が西ベルリンにいらしているなかで奇妙になつかしい気持ちになるのは、このかつての首都が戦後の経済の繁栄に取り残されているゆえでしょうか、私が子供時代に見た建築物そっくりの建物が街のあちこちにのこっているのを見かけるから」²² だという。

この「奇妙ななつかしい気持ち」というのは、小田の「ベルリン物語」を読むとよくわかる。この小説では西ベルリン滞在中の筆者がひょんなことから、戦争中に西宮のパラシュート塔を見ていた半ズボンのドイツ人少年のことを思い出し、日本で過ごしたことがあり、現在では西ベルリンで居酒屋を経営する、自分と同年代の男にその少年の面影を重ねるといふ話だ。戦争という過去において共有する記憶を持つ人間として、ドイツ人を見ていることがわかる。さらに、ベルリンを見てなつかしくなるのは、戦前、道頓堀がウンター・デン・リンデンから、大阪や神戸の建物が「バウハウス」の建築から、それぞれそっくり移し替えたように作られたからでもあるという。²³

「基調報告」では、さらに続けて、こう述べている。

「たとえドイツにゲーテの栄光が過去にあったとしても、また、日本に『能』の深遠、あるいは源氏物語の完成があったとしても、現代に生きて、書く私たち日本とドイツの作家は、殺し、焼き、奪い、また、殺され、焼かれ、奪われたおたがいの歴史を無視して書くことはできないと私は思います。ただ、私たち日本とドイツの作家にとって幸いなことが今もしひとつでもあるとするなら、それは、そういうおたがいの歴史のはてに、そうした歴史を経過しなかったならば見えなかったものを、私たちは今見ることができないのではないかということです。もちろん、それは、私たちがためらわずに過去を直面して、真実にそう求めるなら

²¹ 同書、322-334頁。

²² 同書、325-326頁。

²³ 小田実『D／ベルリン物語』（『小田実全集』小説19）、講談社、2012年、210-211頁。

ばのことですが」²⁴。

このように、小田は日独の作家が語りあう意義を、戦争という重荷を背負っているがゆえに、そうした歴史を通してしか見えないものを見ることができるようになるという点にみている。この点については、ギュンター・グラスも1993年の三島憲一のインタビューにおいて、同じようなことを言っている。

「日本にとってもドイツにとっても〈歴史家論争〉などしている余地はないのであって、両国とも、戦勝国とは違った道を選択すべきなのです。勝利はしばしば人を愚かにします。イギリスには依然として、彼らが行った植民地支配の凄まじい結果について何の議論もありません。ドレスデンやハンブルクといった何万人もの死者を出した爆撃が正しかったのか否か、といった議論もありません。それはコヴェントリーやリヴァプールといった都市に対するドイツの爆撃への反撃だったとはいえ、その爆撃の規模は、イギリスで大いに議論を呼んで然るべきものだったはずです。ですからドイツ人も日本人も、今後とも敗戦というものを意識し続け、カオスに満ちた最近の世界のなかで賢い洞察を自分たちの歴史から得るよう努めるべきです。共産主義に対してまたもや『偉大な勝利』を遂げた後、世界は荒廃し、別の選択の可能性を失った状態に陥って、湾岸戦争のような危機を次々抱える危険を冒しています。ですから、もし日独両国が国連においてこれまでより大きな役割を果たすのであれば、私はそれに基本的に賛成ではありますが、決してパクス・アメリカーナに手を貸す形であってはなりません。紛争解決の新たな方策というものが形成されなければなりませんし、私は、まさに日独両国こそは、その敗北という悲惨な経験から、危機管理の現行のやり方とは根本的に異なる方策を考え出す能力があるのだと思っています」²⁵。

このように、小田とグラスは等しく、「敗北という悲惨な経験から」学んだ日独の作家であるがゆえに担うべき責務を説いていたのである。だが1988年の西ベルリンでの市民同士の交流である「日独平和フォーラム」の挨拶において、小田はさらにこうした日独にも違いがあることも指摘している。

「私は最初の自分の挨拶のなかで、広島に投下された原爆は元来はべ

²⁴ 小田、『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』、前掲書、329頁。

²⁵ 三島憲一 編・訳『戦後ドイツを生きて 知識人は語る』岩波書店 1994年、239頁。

ルリンに落とされるはずのものだったという事実に言及していたのだが、彼もその事実について触れたあと、しかし、ベルリンは広島と根本的にちがうと言いついでいた。

どこがちがうのか。

それは、広島が徹底して被害者の都市であったのに対して、ベルリンは逆に終始加害者の都市であったことだ—と彼は述べた²⁶。

ここでいう「彼」とはキリスト教民主同盟の政治家として知られた「H氏」のことである。ドイツが戦争について自らの加害者性を認めざるを得ないのに対し、日本では原爆投下もあって必ずしもそうではなく、むしろ被害者意識を言いたがる傾向があるとしている。小田はこうしたドイツとの比較を通して、戦争に対する自論がより鮮明に照らし出されたと感じていただろう。原爆投下は、アメリカ側にも責任はあるだろうが、日本の軍国主義的侵略戦争の帰結だったと、彼は終始、主張していたからである。ちなみに、「日独文学者の出会い」のシンポジウムに参加していた石田雄も同様に、日本人の被害者意識の問題について言及していた。²⁷

さらに、小田は『ベルリン日録』において、この日独作家の「出会い」について、その企画の「言い出しべ」²⁸として、こうまとめている、

「そのおかしくもいまわしい『過去』を『共有』したおかげで、そういう『過去』を持たなければ見えなかったものが見えて来たということがあるというのが、私が西ベルリンに来てさまざまな人と会い、論じ、しゃべりあっているうちに感じたことのひとつだが、それをおたがいつきあわせて考えてみるのが、大きく言えば、世界全体になんらかのかたちで寄与し得ることになるのではないか—私がこの『出会い』を考え出した考えの基本にあるものはそうしたことだった」²⁹。

一方、ドイツ側の代表であるグラスについては、このように述べてい

²⁶ 小田実『西ベルリンで見たこと 日本で考えたこと』（「あとがき」）、前掲書、339頁。

²⁷ 石田雄『一身にして二生、一人にして両身』岩波書店、2006年、201頁。ここで石田は、日独の相違点を4点にまとめているが、その中のひとつとして、原爆の被害者としての意識が強く、加害者としての戦争責任を原爆被害によって相殺する傾向があったとして、この点についてはドイツの新聞『ツァイト』紙1986年1月24日に掲載されたH.シュミットの記事を参照にあげている。同様の日本についての見方が当時のドイツにあったこともわかるだろう。

²⁸ 小田実『ベルリン日録』講談社、1987年、246頁。

²⁹ 同書、247頁。

る。

「（；グラスは）『戦後四十年、どうして今までこうした企てが日本とドイツのあいだに開かれなかったのか』と感慨を込めて聞き手にむかって言った。いや、彼はまず自分に言っていたようだった」³⁰。

このように、小田、グラスとも過去を共有してきたがゆえに、日独の作家が対話する意義を大いに認めていたのである。

このうち、第1回の西ベルリンでの会合については、それに参加した野間宏と石田雄が記録を残している。

おりしもその年の4月にチェルノブイリ原発事故が起こり、ドイツ国内でも危機感が広がっていた。グラスは反核・反原発運動をずっとリードしてきたことで知られていた。野間たちもこれに感化され、このとき原発調査のために西ドイツのある原発会社を訪問するという行動を起こしている。³¹

野間はこの時の自らの演説の草稿を、次のように要約している。

「『荒野の40年』、ヴァイツゼッカー大統領の、類ないというべき演説は、極東の日本の上にも輝いている。私は第二次大戦のひふたを切った日本の文学者としてその戦争進行のなかで、日独伊三国同盟を結び、朝鮮、中国、東南アジア、インド、ビルマ、フィリピンなどを侵略し、略奪、破壊した日本の過去を、文学者の戦争責任を問いつづけ、見届け、『ブリキの太鼓』『ひらめ』などの奇想、他の追従を許すことのない強力にして優れた作家グラス氏を困む文学者と討論をつくりたい。

日本軍国主義とドイツ国家労働者党の違い、その下にあった文学者、インテリゲンチヤ、人民大衆の苦難と狂気の相違を照らし出し、日本文学の創造の根元のところにある一切のものを洗い出し、そこに一片の軍国主義の要素も混じりこむことのない鋭い批判力を備えた文学創造の方法を自分のものとして、日本へ帰りたいと願っている」³²。

ここでヴァイツゼッカーの演説というのは、この前年の同日である、ドイツ終戦40周年の日に行われ、日本でも大きな反響のあった演説のことである。野間によると、彼はこのグラスらとの出会いから「ドイツの作家たちの創造的に実に誠実で飾り気なく真正面から問題追及する

³⁰ 同書、249頁。

³¹ 野間宏「ドイツ文学者との対話」『野間宏作品集』第14巻、岩波書店、1988年、142頁。

³² 同書、138-139頁。

姿勢を私は訪れる各地で感じ取った」という。³³

また野間は、ドイツ側で最初に発言したギュンター・グラスの言葉を記録している。この会合について、グラス自身の記述が残っていないので、この記録は貴重である。

「『40年以上経てこれまでこの種の独日作家会議が開催されず、今やっともたらされることは遅きにすぎるくらいであり、今日はまことに意義のあることと考える。自分は国家社会主義の時期には、まだ年のゆかない子供であったので、その時期にあったことは自分で理解できぬことであった。ドイツの近代文学には、その時の権力からどんなに弾圧されようとも何時の日にか必ず日の目を見るという信念に基づいて来た伝統がある。しかし現代のような人類の生存の破壊を前にしては、この信念だけでは十分ではないのではないか』とおよそこのような意味のことを述べて口を閉じた」³⁴。

野間の記録したこのグラスの発言からでもやはり、日独作家の対話に意義があると彼が認識していたことがわかる。さらにまた、「現代のような人類の生存の破壊を前にして」文学がいつかは日の目を見るという信念に疑念を呈しているところは、この年グラスが書き上げた『女ねずみ』によって核による人類滅亡のヴィジョンを前にして、それでも書くことに絶望的にこだわろうとする、当時の彼の姿勢を彷彿させる。

一方、政治学者・石田雄は「たまたま86年5月8日には、当時DAAD（ドイツ文化交流基金）によって西ベルリンに招かれていた小田実たちの発案によって、『独日対話集会』が開かれることになった。ドイツ側からはギュンター・グラスら5人の作家が参加し、日本側では野間宏、李恢成、伊藤成彦が招かれ、現地から小田と私が参加した。この集会での報告で、私は敗戦後の戦争責任に関する『過去の克服』についての日独比較を論じた。その内容は『平和・人権・福祉の政治学』（明石書店、1990年、229頁以下）に収められている」³⁵と報告している。ここで「独日対話集会」というのは「日独文学者の出会い」のことである。

一方、提唱者だった小田は、西ベルリン滞在において「二つの回路形式の仕事」をしたという。ひとつは「日独の市民運動の結びつきの土台となる『日独平和フォーラム』をつくった」ことで、もうひとつは、「日

³³ 同書、135頁。

³⁴ 同書、136-137頁。

³⁵ 石田、前掲書、200-201頁。

独の作家シンポジウムをしたこと」と総括している。³⁶

この「日独の作家シンポジウム」である「日独文学者の出会い」は、帰国後も継続し、河合文化教育研究所とドイツ文化センターの共催で88年6月21日から28日にかけて東京、広島、名古屋で、それぞれ違うテーマで開催される。東京（6月21日）では野間宏、李恢成、大庭みな子、中山千夏、大西赤人が参加。黒古一夫、小田実が司会をした。

広島（6月23日）では堀田善衛、栗原貞子、水上勉、中野孝次、松元寛、小田実が参加。黒古一夫、好村富士彦が司会をしている。

名古屋（6月26日）では埴谷雄高、川満信一、立松和平、道浦母都子、小田実が列席し、司会として牧野剛、小林敏明（他に、京都での講演に中村真一郎）が参加した。

西ドイツ側からは、フリードリヒ・デリウス、ハンス・ヨアヒム・シェートリヒ、リップシエ・モニコバ、ボド・モアスホイザーが参加している。

一方、「日独平和フォーラム」は、小田実の提唱で1987年4月から5月にかけて、西ベルリンをはじめとして西ドイツ各地で開催され、その後日本でも開催された。88年には4月から5月にかけて小田ら21人の市民が西ドイツ、西ベルリンへ行った。8月には今度は西ドイツから18人の市民が来日している。

3 小田とグラスとの比較

小田実はハインリヒ・ベルとの比較でグラスのことを、「ライター」ではなく「ノヴェリスト」「ストーリーテラー」という友人であるドイツ人小説家の説を紹介している。それは、ベルのように政治も生活もすべてを作品の中にこめて書くのが「ライター」とすれば、グラスは政治活動とは別に物語を紡ぐことに重きを置くからだとする。このグラスとベルの比較について、小田は「なるほどな」と思ったとして、それはどっちが上とか下とかいう問題ではないと述べている。そして、小田はグラスよりベルのような「ライター」が日本には少ない。自分はこの「ライター」でありたいのだとする。³⁷ この見方は、グラスを単なる「ア

³⁶ 小田実・玄順恵『われわれの旅～NY・ベルリン・神戸・濟州島』岩波書店、1996年、62頁。

³⁷ 小田実『西宮から日本、世界を見る』話しの特集、1993年、357頁。

ンガー・ジュマン」の作家とする一般的なとらえ方を取らなかった点では正しい。ただ小田実も認めているが、グラスは、自分は作家だから政治活動はしない、あるいはしなくてもいいのだというタイプの作家でもなかった。

彼の本質は物語作者だ、それは間違いない。政治活動をするときにはいったんそれを棚上げしている。この二つの原理を混ぜることはせず、並行してやっているのだ。「ライター」がすべてを混ぜて作品にするとすれば、グラスは「ライター」とは言えない。たとえ小説で政治のことを取り上げていても、自らの政治性は幾重にも相対化している。ただ彼の文学はタブーにあえて踏み込むので、ときに政治的作家よりも破壊力があるだけだ。活動家で反核平和運動を展開し、実際グラスを誘ってベルリンで日独作家シンポジウムも行ったという点で、小田は日本でグラスにもっとも近い作家とみなせるが、「ストーリーテラー」であるグラスと「ライター」でありたい小田の間には、微妙な違いもあるようだ。

小田がグラスのストーリーテラーとしての本質を見抜いていたのは、慧眼であろう。ただ、ここで小田が「ライター」の代表として挙げたハインリヒ・ベルとの対比については、異議がある。ベルは戦中派でグラスの先輩にあたる作家だ。たしかに『カタリーナ・ブルームの失われた名誉』ではきわめてアクチュアルな題材を取り上げていたし、彼自身、社会民主党支持、カトリック教会批判、マイノリティ支援活動とアンガー・ジュマンの作家として知られていた。しかし、こうした活動も市民としての活動である点ではグラスと同じだ。緑の党へのシンパシーも、グラスの方が彼に倣っていた節がある。たしかに戦中派として戦争の生々しい記憶を語る運命を背負ってきたので、グラスよりも社会にコミットしてきた面はあるが、ベルが創作を政治目的のために行ったのであれば、それは正しくないだろう。彼もまた物語作者だったことは、他の作品をみれば明らかだ。

他方、グラスも現実政治では社会民主党を支援し、葛藤に巻き込まれることを恐れはしなかったし、作家という地位に安住することをよしとはしなかった。

「不安定で不快な存在のままでいて下さい。というのも、不安定こそ市民の第一の義務だからです」³⁸ と、「市民」に「不安定」と「不

³⁸ Grass, Günter : Über die erste Bürgerpflicht. In: Günter Grass, Werke Bd.9.

快」さを勧めているが、それゆえ自身も、政治の「闘争」の場に身を置くことを躊躇しなかったのだ。彼もまた、戦前のドイツの作家が抵抗しなかったがゆえにナチズムを招いたという反省を共有して、実際、社会・政治に異議申し立てもする「闘争文化」を担うひとりだったのである。さらに彼はベルとともに47年グループに属し、緊密な文学対話の中で育てられてきた作家でもあった。

ここではむしろ、グラス、ベルという戦後ドイツを代表する作家が、「アンガージュマンの作家」というレッテル貼りに惑わされず、市民として成熟していく様を見てとるべきではないだろうか。ふたりとも、戦後ドイツの市民社会に育てられた新しいタイプの作家だったのである。

また、ペーター・シュナイダーらとの対話で、小田は「アンガージュマンの作家」としてベルになぞらえられて、「オレはベルより偉大だよ」と言って、爆笑を買ったが、そこでこう述べている、

「それから二人のベル論が始まる。ギュンター・グラスに比較しての話だ。まとめあげて言うと、こうなる。ベルは個々の作品のことより文学者として全体の生き方が偉大だった。グラスは個々の作品を通じて評価できる、そこにいてすぐれた作家だ。—それにしても、二人とも生真面目に『政治的』な作家だ。グラスにしても、そういう質朴さにおいて変りはない。なんでまたドイツの作家はこんなに質朴なのかね—と言いかけて、『質朴』ということばをどう英語で言えばよいのかと言いよんだあげく、『素朴にナイーブに人生のもろもろについて徹底的して真面目なのかね』と私の言いたいことをおきかえて言う」³⁹。

ここでは、小田はドイツ人作家の「質朴」さを強調するが、では彼自身はどうなのか。彼とグラスの「市民」としての活動を比較してみよう。共通点としては、政治や社会の動向にコミットする点、社会民主主義的考えを持っている点、自国の戦争責任・加害者性を認めることを主張していた点、草の根的な市民運動をリードしてきた点、市民という存在がグローバルに連帯しようと考えていた点などがある。

他方、異なる点はどうか。小田はベ平連から市民運動を起こし、デモを市民にとって有効な政治手段として活用してきた。社会党寄りの立場をとっていたとはいえ、イデオロギー的というより、その根底には生活

Darmstadt 1987, S. 190.

³⁹ 小田『ベルリン日録』、前掲書、77頁。

主義とでもいう政治活動家としての発想が色濃い。

一方、グラスはより強く「市民」という立場を貫いた作家だったのではないか。小田はそこに生真面目さとともに「質朴」さを感じとっていたわけだ。すなわち、市民という立場で地に足のついた活動をするのは、ただ単に狭義の政治活動だけをするのではなかったのである。グラスは60年代以降ヴィリー・ブラントに感化され、社会民主党の選挙応援を買って出たように、当初から議会制民主主義という制度の中で「必要悪」として特定の政党に加担してきた。選挙民イニシアティブという社会民主党を支援する市民組織を各地で結成し、ブラントの東方外交には作家という立場で政治的アピールに使われることも厭わなかった。そういう意味ではグラスの方がより現実主義的であった。その一方で、デモに立つこともあったが、それは否応なく、であり、基本的には作家というスタンスを維持し続けた。この意味では小田が指摘するようにグラスは根っからの「ストーリーテラー」だったのだ。ただし、冷戦が先鋭化した80年代以降はよりラジカルになり、市民運動組織だった緑の党に近づいたり、社会民主党の政策に反発して脱党したりしている。個人的に仲の良かったシュレーダーが首相になったときにも、難民法を変えないかぎり復党しないと行って、政治的発言を続けた。だが、グラスが単なる「アンガージュマンの作家」ではなかったのは、そうした政治的活動の一方で、彼が芸術活動を展開し、記念館を作り文化イベントを実践してきた点である。また福島原発事故についてのインタビューでも、自らも積極的に関わってきた反原発・反核運動に関して、自分はデモの先頭に立つようなタイプの人間ではない、自分は作家であり、文章を書くことが基本であると述べている。⁴⁰ 政治屋に成り下がったという批判とは別に、こうした姿勢に市民としての作家の「質朴」さを見てとることも可能なのではないだろうか。小田は、そうしたグラスの活動が自らの市民としてのあり方の延長戦上にしかないという点に日本と異なる「市民」のあり方を感じとっていたのではないか。

おわりに

戦争責任については、小田はドイツ人にとって「過去は正面切って話

⁴⁰ ギュンター・グラス「私はよりラジカルになった」(依岡隆児訳)『文學界』2月号、2014年。“Ich bin radikaler geworden” In: Hamburger Abendblatt. 09.04.2011. の翻訳転載。

さなくてはなるまい、そこにおいてはなんの逃げ道もない『絶対悪』としてある」として、「ナチ・ドイツの過去を否定し、そこでケジメをつけないかぎり、西ドイツは西ドイツではないのだ」⁴¹と述べている。それに対して日本では「ヒロシマ・ナガサキ」が被害者意識をまず立たせてしまうことの問題に触れる。この「ヒロシマ・ナガサキ」について、おりしも西ベルリン滞在中の8月6日の朝、原爆投下の時刻に一齐に教会の鐘を鳴らし、西ベルリンのヴィルヘルム教会の前に人々が集まってきた集会を開くのを、彼は目撃する。新聞・週刊誌でも「ヒロシマ」「ナガサキ」の記事は、日本ではもう原爆に関心を持っていない、式典はただかたちだけの物になっているという手厳しいものだった。また、日本は「ヒロシマ」「ナガサキ」の悲惨によって自身の「非」が帳消しにされたと思っているのではないかという発言もあったと、述べている。⁴²

小田はこのように、日独の市民や社会を自らの体験をもとに比較するうちに、日本とドイツの戦争という過去との向き合い方や市民としてのあり方に大きな違いがあることに気づくようになっていったのである。

以上のように、本論では小田実とギュンター・グラスとの関係を中心に、日独文学の<対話>に大きな意味があったことを明らかにしてきた。

なかでもグラスやドイツからの小田への影響は大きかった。たとえば、1994年の「チマチョゴリ事件」のとき抗議の署名を集めて首相官邸に行ったが、その際、ドイツで起きていた「ネオ・ナチ」集団によるトルコ人の家への放火事件に対して西ドイツ政府の官房長官が素早くこうした若者を弾劾し、このようなことは二度と繰り返してはならないと声明を出したことを引き合いに出して、日本の官房長官にも「チマチョゴリ」事件について声明を出してもらいたかったと述べている。⁴³小田が西ベルリン滞在から市民や社会としてのあり方についていかに多くのものを学んだかがわかるだろう。

また、テレビ番組「小田実『遺す言葉』」（2012年7月18日、NHKBS1放映）で、小田はベルリンを再訪したときのことを述べている。ブランデンブルク門の「壁」が崩壊したのを見たとき涙が出たという。85年当時住んでいたアパートも訪ねている。小田のベルリンに対する思い入れの強さがうかがえよう。

⁴¹ 小田『西ドイツでみたこと 日本で考えたこと』、前掲書、78頁。

⁴² 同書、80頁。

⁴³ 小田実『「殺すな」と「共生」』岩波書店、1995年、158-159頁。

他方、グラスは福島原発事故にすぐさま反応し、日本とドイツとの関係に触れており、晩年にいたるまで日本との関係を持ち続けようとしていたことが見てとれる。

戦争という過去に関して、両国が置かれた境遇には共通する点が多い。もちろん歴史認識についての差異があることも本論で見えてきたとおりである。ただ両国の作家たちが交流を通して相手国の歴史と現実を知り、ひるがえって自国を検証批判するよすがとしたことも確かだ。さらにまた、彼らが自分たちの国が加害者として戦争を引き起こし、かつその悲惨を味わってきたがゆえに発言すべきことがあると認識し、それをグローバル化する世界に向けて発信することを自らの使命として受けとめていたともいえるだろう。

本論では、ギュンター・グラスと小田実というドイツと日本の作家が出会い、戦争をめぐって対話をしたということ为例として、日独文学の〈対話〉の可能性について考察してみた。この出会いや対話は戦争の過去を共有しそれと向き合ってきた両国の作家同士によるものであるがゆえに、意義あるものとなっていたのである。グローバル化する現代世界でこうした〈対話〉の意義がより一層増すことを願いたい。

言語文化研究
徳島大学総合科学部

2015年12月27日 印刷
2015年12月27日 発行

徳島市南常三島町 1 - 1

編集兼
発行者 徳島大学総合科学部

徳島市問屋町 165

印刷者 多田 哲也
印刷所 協徳島印刷センター
電話 (088) 625 - 0135